藤村全集

第十一卷

筑摩書房版

新装版　藤村全集第十一卷

昭和四十一年九月十日初版發行
昭和四十八年十二月十日再版發行

著者　島崎藤村

井上達三

東京都千代田區神田小川町二ノ八
株式會社　筑摩書房
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替口座　東京四一二三番

(分類) 0393 (製品) 72911 (出版社) 4604

第十一巻　目次

夜明け前　第一部

序の章……三
上巻……一七
下巻……二八七
解題……五四三
校異……五五三
語註……五九三

夜明け前

第一部

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序の章

一

木曾路はすべて山の中である。あるところは岨づたひに行く崖の道であり、あるところは數十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帶を貫いてゐた。

東ざかひの櫻澤から、西の十曲峠まで、木曾十一宿はこの街道に添うて、二十二里餘に亙る長い谿谷の間に散在してゐた。道路の位置も幾度か改まつたもので、古道はいつの間にか深い山間に埋れた。名高い棧も、蔦のかづらを頼みにしたやうな危い場處ではなくなつて、德川時代の末には既に渡ることの出來る橋であつた。新規に〳〵と出來た道はだん〳〵谷の下の方の位置へと降つて來た。道の狹いところには、木を伐つて並べ、藤づるでからめ、それで街道の狹いのを補つた。長い間にこの木曾路に起つて來た變化は、いくらかづゝでも嶮岨な山坂の多いところを歩きよくした。そのかはり、大雨ごとにやつて來る河水の氾濫が旅行を困難にする。その度に旅人は最寄り最寄りの宿場に逗留して、道路の開通を待つこともめづらしくない。

この街道の變遷は幾世紀に亙る封建時代の發達をも、その制度組織の用心深さをも語つてゐた。鐵砲を改め女を改めるほど旅行者の取締りを嚴重にした時代に、これほど好い要害の地勢もないからである。この谿谷の最も深い

ところには木曾福島の關所も隱れてゐた。

東山道とも言ひ、木曾街道六十九次とも言つた驛路の一部がこゝだ。この道は東は板橋を經て江戸に續き、西は大津を經て京都にまで續いて行つてゐる。東海道方面を廻らないほどの旅人は、否でも應でもこの道を踏まねばならぬ。一里毎に塚を築き、榎を植ゑて、里程を知るたよりとした昔は、旅人はいづれも道中記をふところにして、宿場から宿場へとかゝりながら、この街道筋を往來した。

馬籠は木曾十一宿の一つで、この長い谿谷の盡きたところにある。西よりする木曾路の最初の入口にあたる。そこは美濃境にも近い。美濃方面から十曲峠に添うて、曲りくねつた山坂を攀ぢ登つて來るものは、高い峠の上の位置にこの宿を見つける。街道の兩側には一段づゝ石垣を築いてその上に民家を建てたやうなところで、風雪を凌ぐための石を載せた板屋根がその左右に並んでゐる。宿場らしい高札の立つところを中心に、本陣、問屋、年寄、傳馬役、定歩行役、水役、七里役（飛脚）などより成る百軒ばかりの家々が主な部分で、まだその他に宿内の控へとなつてゐる小名の家數を加へると六十軒ばかりの民家を數へる。荒町、みつや、横手、中のかや、岩田、峠などの部落がそれだ。そこの宿はづれでは狸の骨藥を賣る。名物栗こはめしの看板を軒に掛けて、往來の客を待つ御休處もある。山の中とは言ひながら、廣い空は惠那山の麓の方にひらけて、美濃の平野を望むことの出來るやうな位置にもある。何となく西の空氣も通つて來るやうなところだ。

本陣の當主吉左衞門と、年寄役の金兵衞とはこの村に生れた。吉左衞門は青山の家をつぎ、金兵衞は、小竹の家をついだ。この人達が宿役人として、驛路一切の世話に慣れた頃は、二人ともすでに五十の坂を越してゐた。吉左衞門五十五歳、金兵衞の方は五十七歳にもなつた。これは當時としてめづらしいことでもない。吉左衞門の父にあたる先代の半六などは六十六歳まで宿役人を勤めた。それから家督を讓つて、漸く隱居したくらゐの人だ。吉左衞門にはすでに半藏といふ跡繼がある。しかし家督を讓つて隱居しようなぞとは考へてゐない。福島の役所からでも

その沙汰があつて、いよ〳〵引退の時期が來るまでは、まだ〳〵勤められるだけ勤めようとしてゐる。金兵衛とても、この人に負けてはゐなかつた。

二

山里へは春の來ることも遲い。毎年舊曆の三月に、惠那山脈の雪も溶けはじめる頃になると、にはかに人の往來も多い。中津川の商人は奥筋（三留野、上松、福島から奈良井邊までを指す）への諸勘定を兼ねて、ぽつ〳〵隣の國から登つて來る。伊那の谷の方からは飯田の在のものが祭禮の衣裳なぞを借りにやつて來る。太神樂も入り込む。伊勢へ、津島へ、金毘羅へ、あるひは善光寺への參詣もその頃から始まつて、それらの團體をつくつて通る旅人の群の動きがこの街道に活氣をそゝぎ入れる。

西の領地よりする參覲交代の大小の諸大名、日光への例幣使、大坂の奉行や御加番衆などはこゝを通行した。吉左衞門なり金兵衛なりは他の宿役人を誘ひ合せ、羽織に無刀、扇子をさして、西の宿境までそれらの一行をうやうやしく出迎へる。そして東は陣場か、峠の上まで見送る。宿から宿への繼立てと言へば、人足や馬の世話から荷物の扱ひまで、一通行ある毎に宿役人としての心づかひもかなり多い。多人數の宿泊、もしくは御小休の用意も忘れてはならなかつた。水戸の御茶壺、公儀の御鷹方をも、こんな風にして迎へる。しかしそれらは普通の場合である。村方の財政や山林田地のことなぞに干渉されないで濟む通行である。福島勘定所の奉行を迎へるとか、木曾山一帶を支配する尾張藩の材木方を迎へるとかいふ日になると、たゞの送り迎へや繼立てだけではなか〳〵濟まされなかつた。

多感な光景が街道に展けることもある。文政九年の十二月に、黒川村の百姓が牢舍御免といふことで、美濃境まで追放を命ぜられたことがある。二十二人の人數が宿籠で、朝の五つ時に馬籠へ着いた。師走ももう年の暮に近い冬の日だ。その時も、吉左衞門は金兵衞と一緒に雪の中を奔走して、村の二軒の旅籠屋で晝支度をさせるから國境へ見送るまでの世話をした。尤も、福島からは四人の足輕が附添つて來たが、二十二人共に殘らず腰縄手錠であつた。

五十餘年の生涯の中で、この吉左衞門等が記憶に殘る大通行と言へば、尾張藩主の遺骸がこの街道を通つた時のことにとゞめをさす。藩主は江戸で亡くなつて、その領地にあたる木曾谷を輿で運ばれて行つた。福島の代官、山村氏から言へば、木曾谷中の行政上の支配權だけをこの名古屋の大領主から託されてゐるわけだ。吉左衞門等は二人の主人をいたゞいてゐることになるので、名古屋城の藩主を尾州の殿様と呼び、その配下にある山村氏を福島の旦那様と呼んで、「殿様」と「旦那様」で區別してゐた。

「あれは天保十年のことでした。全く、あの時の御通行は前代未聞でしたわい。」

この金兵衞の話が出る度に、吉左衞門は日頃から「本陣鼻」と言はれるほど大きく肉厚な鼻の先へ皺をよせる。そして、「また金兵衞さんの前代未聞が出た」と言はないばかりに、年齡の割合にはつや〳〵とした色の白い相手の顏を眺める。しかし金兵衞の言ふ通り、あの時の大通行は全く文字通り前代未聞の事と言つてよかつた。同勢およそ千六百七十人ほどの人數がこの宿に溢れた。問屋の九太夫、年寄役の儀助、同役の新七、同じく與次衞門、これらの宿役人仲間から組頭のものはおろか、ほとんど村中總掛りで事に當つた。木曾谷中から寄せた七百三十人の人足だけでは、まだそれでも手が足りなくて、千人あまりもの伊那の助郷が出たのもあの時だ。諸方から集めた馬の數は二百二十匹にも上つた。吉左衞門の家は村でも一番大きい本陣のことだから言ふ迄もないが、金兵衞の住居にすら二人の御用人の外に上下合せて八十人の人數を泊め、馬も二匹引受けた。

木曾は谷の中が狹くて、田畑もすくない。限りのある米でこの多人數の通行をどうすることも出來ない。伊那の谷からの通路にあたる權兵衞街道の方には、馬の振る鈴音に調子を合せるやうな馬子唄が起つて、米をつけた馬匹の群がこの木曾街道に續くのも、さういふ時だ。

三

山の中の深さを思はせるやうなものが、この村の周圍には數知れずあつた。林には鹿も住んでゐた。あの用心深い獸は村の東南を流れる細い下坂川について、よくそこへ水を飲みに降りて來た。

古い歷史のある御坂越をも、こゝから惠那山脈の方に望むことが出來る。大寶の昔に初めて開かれた木曾路とは、實はその御坂を越えたものであるといふ。その御坂越から幾つかの谷を隔てた惠那山の裾の方には、霧が原の高原もひらけてゐて、そこにはまた古代の牧場の跡が遠くかすかに光つてゐる。

この山の中だ。時には荒くれた猪が人家の並ぶ街道にまで飛び出す。鹽澤といふところから出て來た猪は、宿はづれの陣場から藥師堂の前を通り、それから村の舞臺の方をあばれ廻つて、馬場へ突進したことがある。それ猪だと言つて、皆々鐵砲などを持出して騷いだが、日暮になつてその行方も分らなかつた。この勢のいゝ獸に比べると、向山から鹿の飛び出した時は、石屋の坂の方へ行き、七廻りの藪へ這入つた。大勢の村の人が集まつて、到頭一ト矢でその鹿を射とめた。ところが隣村の湯舟澤の方から抗議が出て、しまひには口論にまでなつたことがある。

「鹿よりも、喧嘩の方がよつぽど面白かつた。」

と吉左衞門は金兵衞に言つて見せて笑つた。何かといふと二人は村のことに引張り出されるが、そんな喧嘩は取

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

り合はなかつた。

檜木、椹、明檜、高野槇、櫚――これを木曾では五木といふ。さういふ樹木の生長する森林の方は殊に山も深い。この地方には巣山、留山、明山の區別があつて、巣山と留山とは絶對に村民の立ち入ることを許されない森林地帶であり、明山のみが自由林とされてゐた。その明山でも、五木ばかりは許可なしに伐採することを禁じられてゐた。これは森林保護の精神より出たことは明かで、木曾山を管理する尾張藩がそれほどこの地方から生れて來る良い材木を重く視てゐたのである。取締りはやかましい。すこしの怠りでもあると、木曾谷中三十三ケ村の庄屋は上松の陣屋へ呼び出される。吉左衞門の家は代々本陣庄屋問屋の三役を兼ねたから、その度に庄屋として、背伐りの嚴禁を犯した村民のため言ひ開きをしなければならなかつた。どうして檜木一本でも馬鹿にならない。陣屋の役人の目には、どうかすると人間の生命よりも重かつた。

「昔はこの木曾山の木一本伐ると、首一つなかつたものだぞ。」

陣屋の役人の威し文句だ。

この役人が吟味のために村へ入り込むといふ噂でも傳はると、猪や鹿どころの騒ぎでなかつた。あわてゝ不用の材木を燒き捨てるものがある。圍つて置いた檜板を他へ移すものがある。多分の木を盜んで置いて、板にへいだり、賣捌いたりした村の人などは殊に狼狽する。背伐りの吟味と言へば、村中家探しの評判が立つほど嚴重を極めたものだ。

目證の彌平はもう長いこと村に滯在して、幕府時代の卑い「おかつぴき」の役目をつとめてゐた。彌平の案内で、福島の役所からの役人を迎へた日のことは、一生忘れられない出來事の一つとして、まだ吉左衞門の記憶には新しくてある。その吟味は本陣の家の門内で行はれた。のみならず、そんなに澤山な怪我人を出したことも、村の歴史として曾て聞かなかつたことだ。前庭の上段には、福島から來た役人の年寄、用人、書役などが居並んで、その側

には足輕が四人も控へた。それから村中のものが呼び出された。その科によつて腰縄手錠で宿役人の中へ預けられることになつた。尤も、老年で七十歳以上のものは手錠を免ぜられ、すでに死亡したものは「お叱り」といふだけにとゞめて特別な憐憫を加へられた。

この光景を覗き見ようとして、庭の隅の梨の木のかげに隠れてゐたものもある。その中に吉左衞門が悴の半藏もゐる。當時十八歳の半藏は、眼を据ゑて、役人のすることや、腰縄につながれた村の人達のさまを見てゐる。それに吉左衞門は氣がついて、

「さあ行つた、行つた――こゝはお前達なぞの立つてるところぢやない。」

と叱つた。

六十一人もの村民が宿役人へ預けられることになつたのも、その時だ。その中の十人は金兵衞が預かつた。馬籠の宿役人や組頭としてこれが見てゐられるものでもない。福島の役人達が湯舟澤村の方へ引き揚げて行つた後で、「お叱り」のものゝ赦免せられるやうにと、不幸な村民のために一同お日待をつとめた。その時のお札は一枚づゝ村中へ配當した。

この出來事があつてから二十日ばかり過ぎに、「お叱り」のものゝ殘らず手錠を免ぜられる日が漸く來た。福島からは三人の役人が出張してそれを傳へた。

手錠を解かれた小前のものゝ一人は、役人の前に進み出て、おづ〳〵とした調子で言つた。

「畏れながら申し上げます。木曾は御承知の通りな山の中で御座います。こんな田畑もすくないやうな土地で御座います。お役人様の前ですが、山の林にでも縋るより外に、わたくしどもの立つ瀬は御座いません。」

四

新茶屋に、馬籠の宿の一番西のはづれのところに、その路傍に芭蕉の句塚の建てられた頃は、何と言つても德川の代はまだ平和であつた。

木曾路の入口に新しい名所を一つ造る、信濃と美濃の國境にあたる一里塚に近い位置を撰んで街道を往來する旅人の眼にもよくつくやうな緩慢な丘の裾に翁塚を建てる、山石や躑躅や蘭などを運んで行つて周圍に休息の思ひを與へる、土を盛りあげた塚の上に翁の句碑を置く――その樂しい考へが、日頃俳諧なぞに遊ぶと聞いたこともない金兵衞の胸に浮んだといふことは、それだけでも吉左衞門を驚かした。さういふ吉左衞門はいくらか風雅の道に嗜みもあつて、本陣や庄屋の仕事のかたはら、美濃派の俳諧の流れを酌んだ句作に耽ることもあつたからで。

あれほど山里に住む心地を引き出されたことも、吉左衞門等にはめづらしかつた。金兵衞はまた石屋に渡した仕事もほゞ出來たと言つて、その都度句碑の工事を見に吉左衞門を誘つた。二人とも山家風な輕袗（地方により、もんぺいといふもの）をはいて出掛けたものだ。

「親父も俳諧は好きでした。自分の生きてるうちに翁塚の一つも建てゝ置きたいと、口癖のやうにさう言つてゐました。まあ、あの親父の供養にと思つて、わたしもこんなことを思ひ立ちましたよ。」

さう言つて見せる金兵衞の案内で、吉左衞門も工作された石の側に寄つて見た。碑の表面には、左の文字が讀まれた。

送られつ送りつ果は木曾の穐　　はせを

「これは達者に書いてある。」
「でも、この秋といふ字がわたしはすこし氣に入らん。禾へんが崩して書いてあつて、それにつくりが龜でせう。」
「かういふ書き方もありますサ。」
「どうもこれでは木會の蠅としか讀めない。」
こんな話の出たのも、一昔前だ。
あれは天保十四年にあたる。所謂天保の改革の頃で、世の中建て直しといふことがしきりに觸れ出される。村方一切の諸帳簿の取調べが始まる。福島の役所からは公役、普請役が上つて來る。尾張藩の寺社奉行、又は材木方の通行も續く。馬籠の荒町にある村社の鳥居のために檜木を背伐りしたと言つて、その始末書を取られるやうな細い干渉がやつて來る。村民の使用する煙草入、紙入から、女のかんざしまで、およそ銀といふ銀を用ひた類のものは、すべて引き上げられ、封印をつけられ、目方まで改められて、庄屋預けといふことになる。それほど政治はこまかくなつて、句碑一つもうつかり建てられないやうな時世ではあつたが、まだ〳〵それでも社會にゆとりがあつた。
翁塚の供養はその年の四月のはじめに行はれた。生憎と曇つた日で、八つ半時より雨も降り出した。招きを受けた客は、おもに美濃の連中で、手土産も田舍らしく、扇子に羊羹を添へて來るもの、生椎茸を提げて來るもの、先代の好きな菓子を佛前へと言つてわざ〳〵玉あられ一箱用意して來るもの、それらの人達が金兵衞方へ集まつて見た時は、國も二つ、言葉の訛りもまた二つに入れまじつた。その中には、峠一つ降りたところに住む隣宿落合の宗匠、崇佐坊も招かれて來た。この人の世話で、美濃派の俳席らしい支考の『三類の圖』なぞの壁に懸けられたところで、やがて連中の附合があつた。
主人役の金兵衞は、自分で五十韻、乃至百韻の仲間入は出來ないまでも、
「これで、さぞ親父も悅びませうよ。」

と言つて、辨當に酒さかなゝど重詰にして出し、招いた人達の間を斡旋した。

その日は新たに出來た塚のもとに一同集まつて、そこで吟聲供養を濟ます筈であつた。ところが、記念の一卷を卷き終るのに日暮方まで掛つて、吟聲は金兵衞の宅で濟ました。供養の式だけを新茶屋の方で行つた。

昔氣質の金兵衞は亡父の形見だと言つて、その日の宗匠崇佐坊へ茶縞の綿入羽織なぞを贈るために、わざ〳〵自分で落合まで出掛けて行く人である。

吉左衞門は金兵衞に言つた。

「やつぱり君はわたしの好い友達だ。」

五

暑い夏が來た。舊曆五月の日のあたつた街道を踏んで、伊那の方面まで繭買にと出掛ける中津川の商人も通る。その草いきれのするあつい空氣の中で、上り下りの諸大名の通行もある。月の末には毎年福島の方に立つ毛附け（馬市）も近づき、各村の駒改めといふことも新たに開始された。當時幕府に勢力のある彦根の藩主（井伊掃部頭）も、久しぶりの歸國と見え、須原宿泊り、妻籠宿晝食、馬籠は御小休みで、木曾路を通つた。

六月に入つて見ると、うち續いた快晴で、日に增し照りも強く、村中で雨乞でも始めなければならないほどの激しい暑氣になつた。荒町の部落ではすでにそれを始めた。

丁度、峠の上の方から馬をひいて街道を降りて來る村の小前のものがある。福島の馬市からの戻りと見えて、青毛の親馬の外に、當歳らしい一匹の子馬をもその後に連れてゐる。氣の短い問屋の九太夫がそれを見つけて、呶鳴

つた。

「おい、どこへ行つてゐたんだい。」

「馬買ひよなし。」

「この旱りを知らんのか。お前の留守に、田圃は乾いてしまう。荒町あたりぢや梵天山へ登つて、雨乞を始めてゐる。氏神さまへ行つて御覽、お千度參りの騷ぎだ。」

「さう言はれると、一言もない。」

「さあ、このお天氣續きでは、伊勢木を出さずに濟むまいぞ。」

伊勢木とは、伊勢太神宮へ祈願を籠めるための神木を指す。かうした深い山の中に古くから行はれる雨乞の習慣である。よく〳〵の年でなければこの伊勢木を引き出すといふこともなかつた。

六月の六日、村民一同は鎌止めを申し合せ、荒町にある氏神の境内に集まつた。本陣、問屋をはじめ、宿役人から組頭まで殘らずそこに參集して、氏神境内の宮林から樅の木一本を元伐りにする相談をした。

「一本ぢや、伊勢木も足りまい。」

と吉左衞門が言ひ出すと、金兵衞はすかさず答へた。

「や、そいつはわたしに寄附させて貰ひませう。ちやうど好い樅が一本、吾家の林にもありますから。」

元伐りにした二本の樅には注連なぞが掛けられて、その前で禰宜の祈禱があつた。この清淨な神木が日暮方になつて漸く鳥居の前に引き出されると、左右に分れた村民は聲を揚げ、太い綱でそれを引き合ひはじめた。

「よいよ。よいよ。」

互ひに競ひ合ふ村の人達の聲は、荒町のはづれから馬籠の中央にある高札場あたりまで響けた。かうなると、庄屋としての吉左衞門も骨が折れる。金兵衞は自分から進んで神木の樅を寄附した關係もあり、夕飯の支度もそこそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com